

「二」次の①～⑦の傍線部の漢字の読みをひらがなで答え、⑧～⑮の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 彼の思いが凝縮された言葉だ。 ② 事件を克明に記録する。 ③ 悪事を企てる。
- ④ 知人に財産を譲渡する。 ⑤ 定期的な点検を怠らない。 ⑥ 機械の作動を潤滑にする。
- ⑦ 山中で雪崩が発生した。 ⑧ 商品開発のためにソウイ工夫する。 ⑨ それはキワめてまれな例だ。
- ⑩ 両者ともコウオツつけがたい。 ⑪ これはヒツジカいの物語だ。 ⑫ キンリン諸国との友好関係。
- ⑬ 敵陣をコウリヤクする。 ⑭ スランプにオチイる。 ⑮ 電車がケイテキを鳴らす。

「二」次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

電車の中や交差点で信号待ちをしている人々が片手にスマートフォンを持っていじっている様子、みなさんにとってはごくふつうの日常風景でしょうが、それはいつ頃から日常でしょうか？ 駅での待ち合わせはとりあえず着いたらLINEで連絡というのも、年上の立場からすると「昔とずいぶん変わったものだ」とため息まじりに言いたくなることです。

A その変化の速度は、著しく加速しています。ちよつと調べてみるとわかる通り、携帯電話が普及して小学生も持ち歩くようになったのが2000年代半ばで、その10年後の2013年にはスマートフォンの普及へと一気に変わっています。今ではほとんど使われなくなってしまった家の固定電話が高度成長期の1960年代に普及し、携帯電話が普及するまでに（I）年かかったことと比べると、携帯電話からスマートフォンへの変化のスピードは一気に加速しているのです。

B 現代の日常の風景は、みなさんの一代前であるお父さんやお母さんが、みなさんと同じ年頃であったときには想像もつかなかった世界です。この本がみなさんに読まれるころには、また状況は変化しているかもしれないと思うほど、変化の速度は加速しています。

①情報環境は変貌著しく、それは身体を通じた人とのつながりや、自身の身体感覚をも変える力があることでしよう。特に人とのコミュニケーションは、確実に変わっているようにみえます。LINEを使えばすぐに人とつながることができるので、人とのやりとりの速度や頻度は圧倒的に増えています。SNSを使えば、遠くにいる友人の世界と直結しているような気持ちになることもできます。

その一方で、家の人に取りついでもらわないと話せなかった、固定電話が消えています。その影響は顕著で、会社に入って電話の取りつぎが怖くてできない新入社員が多くなったと聞きます。携帯電話では話したい相手とダイレクトにつながるため、電話を取りついでもらうという経験がないからです。

C 携帯電話ではまだ会話でやりとりすることが主流でしたが、スマートフォンが普及してLINEやSNSの世界になると、相手と直接話すことからすら離れてしまいます。特にLINEの影響は絶大で、短い文章でやりとりすることに慣れてしまい、長文を書くのが苦手になってしまったという大学生もいるほどです。

そこで気になるのは、LINEでつながる人間関係です。長い文章を書けなくなった背景には、説明を必要としない人間関係があるように思えてなりません。人間関係が閉じた、親しい者だけのつながりになってしまわないか、心配です。それは若者特有の

ことかもしれないませんが、②一方で日本人特有なのかもしれないのです。

いわゆる東アジア文化圏に位置する「日本人論」の特徴として語られるのは、和を大切にすること、他者との人間関係の中に自己をとらえる「相互協調的自己観」にあります。一方の西欧社会は、他者から独立した存在として自己をとらえる「相互独立的自己観」を持ち、個を大切にします。こうした日本人の特徴は1946年にアメリカの文化人類学者ルース・ベネダイクトの『菊と刀』で語られ、最近になってアメリカの社会心理学者リチャード・ニスベットが実験的なデータで証明しています。

自己のとらえ方は文化によって異なり、日本人が同質の集団を作ろうとするのは、その自己観につながる場所があるのかもしれませんが。こうした傾向は、いちいち説明しなくていいという楽しさはあるのですが、集団としての閉鎖性は行き過ぎると窮屈で多様性の許容度が下がります。他者に不寛容になってほんの少しの違いに敏感になり排他的になることは、へたをするといじめにもつながりかねません。注意が必要です。

ところで、最近ではビデオ通話を楽しむことも、日常となっています。通信料を気にせず海外とも気軽に映像でつながることは、世界観を変えています。留学生は遠く離れた家族と毎日つながっているかのようで、海外との仕事のやりとりも格段に楽になり、**D**互いの時差を配慮した会議時間の設定が悩ましい課題となっています。海外の学生と気軽に話しながら英会話を学べるという便利な道具でもありますが、③遠く離れた友人と、いつでもどこでも気軽につながれる感覚は、かつてはありませんでした。

海外との距離の短縮は、欧米から遠く離れた東アジアの片隅の日本で世界を相手に仕事をしてきた身からすると、ひしひしと実感します。研究者の日常は、欧米で発刊される学術雑誌に論文を投稿し、編集者とやりとりを通してようやく論文を発表することにあります。

投稿をしてから編集者から手紙が届き、手紙に書かれた指示通りに書きなおしをして再び編集者に手紙を出して……そんなやりとりが2〜3回は続くのです。海外とのやりとりが郵便だった時代は、手紙を出してから返事が来るまで、待つこと数か月。それがメールになり、今や返事は即日です。休憩する暇がなくなったという人もいますが、返事を待つだけに何か月もかかっていたことがその日のうちに済んでしまうことは、ほんとうに画期的なことでした。

その速度の変化はまるで、海外旅行が船旅だった時代から、ジャンボジェット機の旅に変わったような感じですか。しかも旅という限られた非日常世界が変わるのではなくて、ふだんの生活が変わるのですから、その変化はさらに影響が大きいです。人とのやりとりの根本を変えているように感じます。

一番の影響は、他人との距離感が変わったことにあるのではないのでしょうか。それによって、人間関係の作り方も変わっているようにみえます。距離とは関係なく、遠くにいる人とも、親しければその関係はどんどんつながります。海外から短期訪問した大学院生と帰国後も交流が続くのも、遠くに引越した知り合いと付き合いが続くのも、インターネット環境のおかげです。

その一方で、④近いけれど「違う」と感じる人とは、つながらなくなります。場所が近いだけの近所よりも、趣味の合う遠くの知り合いの方が身近に感じるという、不思議な現象もおきています。

趣味の合う人だけを好みして親しくなるのは楽しい反面、それが行き過ぎれば、どうなるでしょうか？ 近い所にいる異質な他者からは、世代差を含めた様々な違いを知ることができます。異質な他者とは、互いにわかりあえない部分を説明しあうという、社会関係の築き方を学習できるのです。

それは結果として、多様な他者を許容することを知る機会になるのだと思います。同じ目線の者だけが集まって異なる他者を排除しないように、多様な他者を許容する態度が欠落することにならないようにと願います。

SNSの普及から、見知らぬ他人でも趣味が合いさえすれば急速に距離が縮まることもあるので、人によっては友達の数が増えるに増えていると感ずるかもしれません。SNSの知り合いの多さと社交性の高さから、社交性を支える脳活動を調べようとする研究も出ています。

まだ明確な結果は出ていないものの、社会性の広さはストレスにもなりうることを示す研究もあります。広がりのある付き合いは良い面もある反面、現代の交流の広さは、人類がこれまで経験したことのない規模でもあるため、注意を要する点も出てきます。また、こうした交流を悪用しようとする大人もいるわけで、経験が少なく無防備な若者は、だまされてプライバシーを開示したり、連れ出されたりすることがないように、注意を払うことも必要です。

広い世界に友人関係を展開することは、学校の窮屈な友人関係にきゆうきゆうとするよりも、自由です。クラスメートを相手にするときはSNSの友人とでは、人格を変えてふるまうという話も聞きます。そうになると、SNSの中の自分と現実の自分、どちらがほんとうの自分になるのでしょうか？

それは、「自分とはなにか」という哲学や心理学が長年追究してきた大きな問いにもつながる話です。少なくとも今の大勢としては、「実のある「身体」をとまなう方が自分らしく感ずるでしょう。しかし、現時点のこの回答をさらに混乱させる技術として、⑤バーチャルリアリティがあります。

SNSの次に来るのは、バーチャルリアリティ世界ではないかといわれています。インターネットによって、遠くに住む人々同士がやりとりできるようになりました。SNSでは文章で、ビデオ通話では映像でやりとりしていたことが、バーチャルリアリティでは架空世界に入りこんで交流できるのです。自身が架空世界に入りこみ、自身の身体を介して交流するということが、自身の身体感覚を拡張させる画期的な技術です。

これまでにお話ししたように、すでに身体は様々な拡張されています。人工内耳などの技術が進み、⑥※アンドロイド技術が身近なものとなっています。そのなかで、結果的にアンドロイド技術をうまく使いこなすことができるかは、私たち自身の学習能力にかかっていることもわかりました。いかに代替物を「身体」として取り入れることができるかの「身体の問題」には、学習がからんでいるのです。

しかし学習というのは、楽しくなければうまくいきません。みなさんも思い返してみると、実感できると思います。テストのために渋々おぼえる漢字や英単語がなかなか頭に入らないのに比べると、興味のあるゲームのルールやキャラクターの名前などは、多少難しくても無理なくすいすいおぼえられるのではないのでしょうか。

うまく学習にのるためにはごほうびが必須ですが、好きで楽しいことそれ自体がなによりも高い報酬になります。そのため、好きなことは必然的に学習が進むのです。つまりアンドロイド技術もエンターテインメントで活用すれば、とうぜん学習の進みは速くなるのです。

⑦エンターテインメントとして一般的なものに、バーチャルリアリティ・チャットがあります。バーチャルリアリティ世界で※アバターを介して人とつながるといっても、この数年で急速に普及していて、ステイヴン・スピルバーグ監督による「レディ・プレイヤー1」という映画の題材にもなっています。

映画ではかっこよいアバターの姿が出ていますが、実際のバーチャルリアリティの世界はもう少しアニメ系の姿です。ぬいぐるみやボーカロイドロボット（有名な初音ミクのように、合成音声にあわせて作られたバーチャルアイドル）のような姿で動きまわって、まったく知らない世界の人たちと出会い、相手は英語でこちらは日本語と、言葉もまったく通じていないのに言葉を投げかけあったりしています。

自身もバーチャルチャットを駆使して取材を続ける新聞記者から聞いた話ですが、ふだんは近づきたい男性が、ぬいぐるみやかわいい女の子の姿に変身すると、気軽に声をかけあうことができるようになります。その没入感も、SNSを超えるとのこと。家に帰るとバーチャルリアリティの世界に没入し、そのまま仕事をしたり、あるいはそのまま眠りに落ちて、バーチャルリ

アリティイ世界の中で朝起きて「おはよう」と挨拶しあうことに心地よさを感じるそうなのです。バーチャルリアリティの中で結婚をすることもあり、そうになると、バーチャルリアリティの世界と今生きている世界、どちらが真実の世界かわからなくなるのではないのでしょうか。

専用ゴーグルやそれなりのパソコンといった準備が必要なため、今は趣味の世界のつながりのような雰囲気ですが、今後より多くの人の交流の場となったときには、なりすまし等への注意が必要となるかもしれません。

バーチャルリアリティ・チャットは、日本発信の技術のひとつです。こうした技術の背景にあるのが、自分と違う身体になることに抵抗がないこと。じつはこれこそが日本らしいところで、抵抗感の大きい国や文化もあるのです。

—山口真美『こころと身体心理学』による—

(注) ※人工内耳：人工臓器の一つ。神経に直接信号を送ることで音が聞こえるようになる。

※アンドロイド：動きや外見が人と見分けがつかないほど精巧に作られたロボット。

※アバター：インターネットやバーチャルリアリティの空間内で、使用者が自分自身を投影したデジタル上のキャラクターやアイコン。

問一 A D に入る語を次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか選べない。

ア しかし イ しかも ウ だから エ つまり オ むしろ

問二 (I) に当てはまる数字を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 20 イ 30 ウ 40 エ 50

問三 傍線部①「情報環境は変貌著しく」とあるが、その結果どのような状況が生まれたのか。次の(1)～(4)について、合うものは○、そうでないものは×でそれぞれ答えなさい。

- (1) 固定電話から携帯電話に変化したことによって、相手と直接話すことを怖がる人が多くなった。
- (2) LINEの影響で長文を書くのが苦手になり、ますます親しい者だけでつながるようになった。
- (3) SNSの普及によって、見知らぬ他人でも趣味が合いさえすれば急速に距離を縮められるようになった。
- (4) バーチャルリアリティ・チャットによって、アバターを介して他者となることができるようになった。

問四 傍線部②「一方で日本人特有なのかもしれないのです」とあるが、「人間関係」における「日本人特有」な傾向とはどのようなものか。文中から十二字で探し、「〜こと。」に続くように抜き出しなさい。

問五 傍線部③「遠く離れた友人と、いつでもどこでも気軽につながれる感覚は、かつてはありませんでした」とあるが、このこととの例として筆者はどのような自身の体験を述べているか。その体験に当たる部分を探し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問六 傍線部④「近いけれど『違う』と感じる人とは、つながらなくなります」とあるが、このことによるデメリットとしてどのようなことが述べられているか。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 趣味の合う人だけをえり好みして親しくなれることは楽しい反面、友人の数が減ってしまうこと。
- イ 近くの知り合いよりも遠くの知り合いの方がより身近に感じられ、人との付き合い方に混乱が生じること。
- ウ 距離に関係なくつながるといふ社会性の広さがストレスになり、多様な他者を排除するようになること。
- エ 異質な他者とわかりあえない部分を話し合う機会がなくなり、多様な他者を許容できなくなること。

問七 傍線部⑤「バーチャルリアリティ」とはどのようなものか。文中の語を使い、「コンピューター技術。」という語に続くように答えなさい。

問八 傍線部⑥「アンドロイド技術が身近なものとなっています」とあるが、その技術を使いこなすために私たちはどうしたらよいか。本文の内容に沿って五十字程度で説明しなさい。

問九 傍線部⑦「エンターテインメントとして一般的なものに、バーチャルリアリティ・チャットがあります」とあるが、「バーチャルリアリティ・チャット」を生み出した背景にある日本人の性質とは何か。文中から二十字以内で探し、抜き出しなさい。

「三」次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

祖父の墓参りの時にかぐ線香の匂いが、あの子のいないあの子の家いっぱい立ち込めていた。

白と黄色の菊と百合の花が飾られていた。

黒と白の垂れ幕が、いつもは西瓜や青いりんごが並ぶ店の前には下がっていた。

払いのけることのできない記憶。草の茂みの間から見た、あの子の白い足の裏。あの子は自分の身に起きたことを理解することもないまま、あの青緑色の沼にはまったのだ。死んでいく時、ひとは自分が死んでいくとわかるものだろうか。そんな新しい疑問が生まれた夕べだった。

葬儀は母と一緒にだった。母はその日のために、白い木綿のブラウスと背中ではばってんの形になる紺色のジャンパーとスカートを買ってくれた。

祭壇に置かれた＊モノクローム写真。坊主刈りのあの子は身体を折り曲げて口をいっぱい開けて笑っていた。前歯は欠けたままで。

果物の籠かごや文明堂のカステラの大きな箱が供えられていた。あの子はカステラの耳が好きなのに、とわたしは思った。

あの子の母親は祭壇の前の椅子に座っていた。黒い着物を着て、椅子に背もたれがないとそのまま後ろか前に崩れ落ちそうだった。その様子は何かに似ていた。公会堂で見た人形劇。公演が終わって木箱の中にだらんと寝かされていた人形。さっきまでは歌ったり踊ったりしていた人形から、いのちが抜けていた。とんがり帽子をかぶった人形も、ひらひらのドレスを着た人形も、針金でできた丸い眼鏡をかけた人形も。

①あの子の母親もあの時の人形みたいに見えた。泣き腫らした目をして、時々きつと頭をあげて、あの子の写真を見ては、糸が切れたようにたらつとまた頭を下げた。

「苦しかったろうね。苦しかったろ」

あの子の母親は手拭いを広げて顔を覆った。そして、ふらつきながら立ち上がった。それから通りのほうに歩いて行って、後ろから誰かに抱き止められた。

母に促されてわたしも手を合わせながら、わたしが死んだら、おかあさんはどうなるのだろうか、と考えていた。②あの子の母親のようになるのだろうか。

どうかどうか「わたしを死なせないでください」。

みんなを真似まねてあの子の写真に手を合わせながら、わたしは③別のことを祈っていた。あの子のお葬式から帰って、玄関で母はわたしの頭から塩をばらばらとかけてくれた。

「おきよめっていうのよ」

なめくじみたいだ、とわたしは首をすくめた。なめくじに塩をかける遊びを、あの子と一緒にやったことがあった。

塩を払った時、わたしは白いブラウスの肩に何かがついているのに気がついた。

「あ、百合の花粉がついちちゃったね。祭壇にも百合が飾ってあったから。百合の花粉はなかなかとれないのよ」

指先で弾くようにして花粉を払いながら、そのまま母はわたしを肩ごと抱き寄せた。そして抱えたわたしごと④身体を左右に振って歌うように言った。

「冬子はどこにも行かない。おかあさんといっしょよ」

たったひとりの子ども、わたしが死んでしまったら、母はどうなるのだろうか。

言葉は追いつかなかったが、わたしには⑤母がとる道が想像できた。

わたしが死んだら、生きる理由が無くなるのだと母は言った。わたしの死はそのまま母の死になるのだ。

あの子の母親は、これからどうするのだろうか。泣き腫らした顔がまだ心の中にあつた。あの子の母は生きていくに違いないと思いい、わたしの母は死んでしまうのだと怯おびえたのだった。それは懸命に考えた末にようやく辿たどり着いた、七歳のわたしの答えだった。あの子のおかあさんには、ほかに子どもがいた。わたしの友だちもそうだし、もっと小さな子もいた。だから、どんなに悲しくても、あの子のおかあさんは死なない。

⑥子どもという存在が、大人を「こつち側」に引き留めておくのだ。けれど、わたしの母に子どもはわたししかいない。だから、わたしは死んではいけない、生きていかなくてはいけない……。

それは子どもわたしにとって、たとえようもないほど大きな発見だった。暴力そのものとも言えるほどの課題を、わたしはあの子のお葬式の日知ったのだ。

母を愛する気持ちと比例して、あれ以来、わたしが死んだら母をも死なせるというI鎖いそを引きずることになった。

子ども時代の子どもはみな、自分の死を怖おそれるものだろうか。死をまだ知らなかったわたしが、あの子の死からあんなにも自分

の死を怖れ、眠ることさえ怖くなってしまった。ひとの死ではない。自分だって死ぬのだと気づいてしまったのだ。

Ⅱ 大人は知っているだろうか。自分の死を怖れる子どもがいることを。わたしの寝顔も言葉も、わたしが抱えた恐怖を語ることはできなかつたはずだ。わたし自身、⑦ 死への恐怖を語ることさえ、してはならないことと決めているようなところがあつた。

「いいねえ、子どもは。苦勞を知らなくて」

時々上京する祖母は、わたしを見て言った。

特別な状態ではなく、子どもにとってはごく当たり前の日常が続く中で背負い、ふつと浮かんでくる死への怖れ。

クリスマスの時だけ行く近くの教会。牧師さんだと母に教わつた黒い服を着た男のひとも、死についての答えを話してはくれなかつた。

子どものわたしはあの頃、時折り湧きあがる押しつぶされそうな恐怖について語るどんな言葉も持っていなかつたし、そういった恐怖が自分の内側にあることを誰にも言えずにいた。死ぬことは母への最大の裏切りに思えていたから、死について考える自分がいることさえも、母への裏切りのように思っていたのだ。

母が死んでわたしが残ることより、どうしてわたしは、わたしが先に死んでしまうことしか考えられなかつたのだろう。わたしが死んでいる布団の脇で泣いている母を、いったいどれほど思つたことか。

もしひとつだけ願いを叶えてやると言われたら、わたしは **A**、自分の不死を願つただろう。そんな願望も、その願望を導き出す恐怖も誰にも打ち明けられないまま、わたしはわたしの子ども時代を生きた。

畳を踏む足音が近づくのを、子どものわたしは、布団の中で耳を澄ましながらいまかいまかと待ち構えていた。冬が来ていた。

部屋の電気は豆電球に切り替えられていた。布団が敷かれてるのは、夜以外は居間になる部屋だつた。

夕食がすむと部屋の隅に片づけられる折り畳み式の卓伏台は、食卓にも、子どものわたしが絵を描く時の机にもなつた。時々母が会社から持ち帰つた分厚い帳簿が置かれ、算盤そろばんが弾かれる音が響いた。

「⑧ ざんぎよう、ざんぎよう」

母の仕事で辛うじて支えられていた母子の暮らしの内実を、子どものわたしは知らなかつた。

小さな箆筒たんすがひとつ。その上にラジオとピンクの服を着た西洋人形が置かれていた。ピンクは好きな色ではなかつた。女の子はみなピンクが好きだと大人は思っているようだ。ピンクのドレスを着た西洋人形をわたしにくれた山田さんもそうだつた。母が勤

める会社の同僚で、身体の大きな女のひとだった。

豆電球の薄い明りを通して、わたしは西洋人形のほうを見た。目鼻立ちが見えない人形は、顔の白さだけが際立って浮いて見えた。

部屋に電気がつけてあるのは、わたしがそう頼んだからだった。あの子が死んでから、暗い部屋がいままで以上にこわくなっていた。

天井から下がった黒い紐を一度引つ張ると大きなほうの電気がつき、もう一度引つ張ると豆電球に替ってついた。薄明りの中で、子どものわたしはすっぽりと布団に包まれて天井を見上げていた。豆電球をつけると、電気の笠の横にあるしみが今夜も見えた。

翼を広げた鳥。ひときわ色が濃い丸いしみが鳥の目で、両側に広がった細長く薄いしみが羽ばたく翼だった。鳥は時々、近所の崩れかかったセメント塀の上を両腕を広げて歩いてみせたあの子に見えることがあった。編み直したセーターの胸をこすって塀をよじ登ってから、両腕を広げてバランスをとりながら、あの子は **B** コンクリートの塀の上を歩いてみせたのだ。渡り切ると、あの子は鼻の穴を膨らませて、

「見て、見て」と笑うのだった。

「ひと粒三〇〇メートル」。キャラメルの箱に描かれた走る男のひとの絵を真似て、両腕をあげて、あの子は塀の上で達成を誇示してみせた。

あの子はいまどこにいるのだろう。時々、わたしは考えた。塀の上に黒い猫がいると、なぜだかどきどきとした。あの子が冬になるとよく着ていた青色のセーターの後ろ姿を見ると、追いかけて行って前に回り、顔を確かめないではいられなかった。けれど、あの子はいなかった。死ぬということは、どこにも居なくなること。わたしは知った。けれど、わたしの心にはあの子は確かに居るのだった。

台所の水音が消えた。もうすぐ母が来る。

畳を踏む足音が近づいてきた。わたしは目を閉じる。⑨眠ったふりをして、母を迎えるのが好きだった。

「眠ってしまった？ よーし、寝たかどうか、試してみよう」

掛布団の裾のあたりから、すっと入ってくる冷たい手。笑いを必死に抑えて、眠ったふりを続ける。

「こちよこちよこちよ」

わたしの足の裏を冷たい手がくすぐる。くすぐったさと冷たさで、わたしは声をあげて笑いだす。わたしたちの気に入った夜の

儀式だった。

その声を確かめてから、豆電球が大きいほうの電気に変わり、西洋人形の顔がいつもの澄ました顔に戻った。白いソックスをはいた足が子どもの布団の横に座る。ソックスは時々※別珍べっちゃんの足袋たびになることもあった。

こうして母がそう呼ぶ「絵本の時間」がはじまるのだった。わたしが眠りに入る前、ふたりで過ごすごく短い時間を、母はそう呼んだ。

「おかあさんと冬子の時間」、わたしはそう思っていた。どちらが欠けても、この時間は成り立たない。

白いハンカチーフに包んだ弁当箱をもって仕事に向かう朝の母は、いつだって急いでいた。手を振って⑩駅に向かう母の顔が、わたしを見る時とまったく違うことも知っていた。

一日の終わり、この時間だけが、母とわたしだけの特別の時間だった。

—落合恵子『泣き方をわすれていた』による—

(注) ※モノクローム：色彩のついていないもの。白黒。

※別珍：綿糸で織ったビロード。服地や足袋などに用いる。

問一 傍線部①「あの子の母親もあの時の人形みたいに見えた」とあるが、それはどのような様子だったか。「〴〵のような様子。」に続くように、本文中から十字以内の表現を探し、抜き出さない。

問二 傍線部②「あの子の母親のようになるのだろうか」とあるが、どのようになるというのか。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア わが子を失っても寝込んだり、倒れたりすることなく、何とか気丈にふるまえるようになる。
- イ 決して取り乱すことなく、ただ静かに落ち着いた様子で子供の突然の死を受け止めるようになる。
- ウ 自分の子供の死に対する激しい悲しみに耐え切れず、泣き腫らして生气を失ったようになる。
- エ 自分のせいで子供を死なせたという責任の重さに苦しみ、糸の切れた人形のようにだらっとなる。

問三 傍線部③「別のこと」とは、どのようなことか。簡潔に説明しなさい。

問四 傍線部④「身体を左右に振って歌うように言った」とあるが、なぜ母親はこのような動作をしたのか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一人娘を失いたくないという切実な思いを持ちつつも、その思いが娘や自分自身にとって深刻な表現になることを避けたかったから。

イ いつかは娘とも別れる日が来るであろうことを予感しつつも、その日が訪れる時までは決して娘を手放すまいという思いがあるから。

ウ 娘が男の子の死のショックから立ち直れないでいることを心配し、おどけた言い方をすることで娘の気持ちを励まそうとしたから。

エ 自分自身にも死が近づいていることに気づいているため、そのことを娘に知られまいとわざと明るくふるまうことでごまかそうとしたから。

問五 傍線部⑤「母がとる道」とは、どういうことか。分かりやすく説明しなさい。

問六 傍線部⑥「子どもという存在が、大人を『こっち側』に引き留めておくのだ」とあるが、どういうことか。「こっち側」の言い表す内容をわかるようにして、四十字程度で説明しなさい。

問七 二重傍線部Ⅰ「鎖」が比喩しているものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 悲哀 イ 束縛 ウ 運命 エ 重荷

問八 二重傍線部Ⅱ「大人は知って子どもがいることを」の部分で使われている表現技法を漢字三字で答えなさい。

問九 傍線部⑦「死への恐怖をくところがあった」とあるが、「私」がこのような状態になるのはどうしてか。その理由を述べている一文をここより後の文中から探し、初めの七字を答えなさい。

問十

A

・

B

に入る語をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- | |
|---|
| A |
|---|
- ア 仕方なく イ ためらいなく ウ 関係なく エ あてもなく
-
- | |
|---|
| B |
|---|
- ア 不安げに イ 涼しげに ウ 得意げに エ 怪しげに

問十一 傍線部⑧「ざんぎよう、ざんぎよう」とあるが、この表現の説明として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 家に持ち帰った仕事をしながら疲れて眠ってしまった母親の大きな寝言が、直にわたしの耳に聞こえている。
イ 二人の生活を支えるために家で仕事の残りをしていた母親の独り言が、わたしの頭の中でこだましている。
ウ 職場の仕事の続きを家でもやらねばならない母親の悲しい叫びが、何も知らないわたしに向けられている。
エ 夕食が終わるとやりたくない仕事をやらざるを得ない母親のぐちが、はっきりと家の外にまで響いている。

問十二 傍線部⑨「眠ったふりをして」とあるが、これは何のためか。「くのため。」に続くように、本文中から十五字で探し、抜き出しなさい。

問十三 傍線部⑩「駅に向かう母の顔」とは、どのようなものか。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 娘といる楽しい時間から仕事の時間へと切り替えるためにも、母親であることを忘れようとする顔。
イ 毎朝、職場に遅れないように出勤しようとしているので、何も目に入らず精神的にゆとりのない顔。
ウ 生活も苦しい上に、公私を明確に区別する厳しい性格のため、すでに気持ちは仕事のことを考えている顔。
エ 弁当箱を持って家から駅に向かう時点で、母親としての立場から仕事に向かう立場へと切り替わった顔。

